

午前零時過ぎ、
静まり返った終電の車内。



ふう……
今日も予備校、
遅くなっちゃった
な。



きゅう……
くすん……



え……？
なにあの子……
ぬいぐるみ？



ぴっ！？
め、めがあった……!?



「次は、終点——」
無機質なアナウンスが響く。

次は、終点——

てけてけ……！
おねえちゃん！

たっ
たっ
たっ

わっ、本物！？
本当に生きてる……！

たすけて、
おりそこねちゃったの
……

おやまの、
おやしろに
かえりたいの……

乗車券

周りの乗客は誰も、
この小さな存在に気づかない。

よし、わかった。
一緒に行こう！

きゅっ！
ありがとう！



街灯の明かりが途切れ、
夜の闇が濃くなる。



はぁ……
階段、結構
キツイね……

もうすぐだよ！
がんばって！



わっ……！
火の玉……!?



みんな、
おむかえにきて
くれたの！

あったかい光……
綺麗……



着いた……
ここが、ころりのおうち？



木々に囲まれた境内は、
神聖な静寂に包まれていた。

ころり、
無事に戻ったか。

おやびん！
電車乗り過ごし
ちゃったの！

やれやれ……
心配をかけたな。

人の子よ、
幼子を送り届けてくれた
恩、感謝する。

いえ……
無事に帰れて
良かったです！

夜道の護りにと、
これを授けよう。

おねえちゃん、
バイバイ！
またね！



ふふっ、
本当に不思議な
夜だったな。



街はいつもの夜の顔のまま、
静かに眠っている。



ただいま……
しーっ、
静かにね。



それは夢ではなかった証拠のように、
淡く瞬いていた。



明日からの帰り道、
ちょっと楽しみかも。

誰も知らない小さな出会いを胸に、
夜は優しく更けていく。